

全国邪馬台国連絡協議会会報

邪馬台国新聞

発行所 全国邪馬台国連絡協議会事務局
 発行者 菊池秀夫
 〒245-0013
 神奈川県横浜市泉区中田東3-11-1-2
 Tel.090-1201-5200 (河原)
 URL www/zenyamaren.jp
 E-mail uhh52172@nifty.com



2014年10月5日 第1回全国大会「科学的年代論で解く邪馬台国」の講演講師
 左から 安本美典顧問、中村俊夫教授、大塚初重顧問、中塚武教授、光谷拓実教授、
 内野勝弘副会長、菊池秀夫事務局長

会誌『邪馬台国新聞』 「創刊号」発行について

会長 鷲崎弘朋

全国邪馬台国連絡協議会は、邪馬台国と古代史解明に新たな道を切り開く国民的プロジェクトを目指す全国組織として、約一年間の準備期間を

経て、二〇一四年(平成二十六年)四月に正式に発足しました。

当会は邪馬台国と古代史の謎の解明を目指し、全国の団体会員と個人会員により全国ネットワークを形成しております。また、特別顧問の先生方にご指導と助言をいただきます。そして、全国大会(東京、近畿東海、中四国、九州四地区の持ち回り)と地区大会を毎年開催致します。また、地方で行う大会は地元と連携し地域興しも兼ねて行う計画でございます。初年度は、二〇一四年七月に第一回東京地区大会(会場：文化シヤッターBXホール)および第一回全国大会(会場：明治大学)を開催致しました。

二年目の二〇一五年度は、五月九日に第一回九州地区大会(会場：九州国立博物館)六月二十日に第二回東京地区大会(会場：港区立総合区民会館きゅりあん)十月十七日に第二回九州地区大会(会場：佐賀市の二か所)十一月二十九日には第二回全国大会(会場：九州にて)の開催を予定しております。このような全国大会と地区大会を通して①邪馬台国と古代史の解明②全国の団体や愛好家とのネットワーク作り③地域との連携による地域興しを推進して行きたいと思っております。これらを推進する上では、また会の発展にとつて極めて重要な意味を持つのがメディア戦略で組織上でも「メディア委員会」を設置しております。

当会ホームページおよびネット上の「会員交流広場(掲示板)」、会員専用のメールアドレス



鷲崎弘朋会長

は既に実施しております。また、全国大会や地区大会のビデオ映像を会員限定で配信しております。これらに加えて、このたび、紙ベースの会誌『邪馬台国新聞』を発行し、会員の皆様へお届けする運びとなりました。この会誌『邪馬台国新聞』は、当初は不定期または不定期ではありますが、徐々に充実して行く所存でございます。

そして、ホームページ等のネット上でのメディア戦略、会誌『邪馬台国新聞』やチラシ等の紙ベースのメディア戦略を両輪として総合的かつ斬新なメディア戦略を実施して行きたいと思っております。会員の皆様の熱意と英知を結集して邪馬台国と古代史解明に新たな道を切り開くことを目指す当会は、当初から「試行錯誤」「手探り」の連続で、今後もこれが続くと思われまます。これに重要な役割を果たすメディア戦略も同様に「試行錯誤」「手探り」となるでしょう。

会員の皆様におかれては、この会誌『邪馬台国新聞』での情報をご利用されるだけでなく、ご意見や投稿などを積極的に寄せいただくなど、大いに盛り上げ会誌を充実させていただければと思います。どうか、よろしくご願ひ申し上げます。

各地区活動報告

東京地区

副会長・東京地区代表 内野 勝弘

「全邪馬連」について、よく聞かれる事は、「何の目的で作ったの? いろんな説の人が集まっているので纏まるのがたいへんですね」「財政(お金)は大丈夫なの? 会員募集がたいへんでしょ」「将来、トラブルや分裂は起こらないの?」

すべてのお答えは「ハイ。そうなんです。たいへんなんです」かように「大きな夢」と「大きな問題」を抱えながら出発したのが「全邪馬連」です。

①学会、アマチュアが協力して邪馬台国と古代史を科学的に研究、解明しましょう

②全国ネットワークで古代史団体、愛好家との交流、親睦を高めていきましょう

③地域と連携し大会等を通じて地域おこし、古代史ファンを増やしていきますように

日本の古代史解明には多くの課題が横たわっています。考古学、文献学、遺伝学、環境学、民俗学などの「学際」の連携不足、学会の封鎖性、保守性、熱心に研究している町人学者の評価不足や発表の場がない、科学的分析解明のプラットフォームのボクスカスタなどが古代史、邪馬台国の解明を遅らせているように見えます。

そのような解決策の一つとして私たちは全国の熱心な古代史団体や在野研究家との交流や発表の場を作り多くの仲間を集結し日本初の「全国組織」「モノ言うパワー団体」を設立しました。

しかし、上記のご質問のごとく、この団体は初期のスタートの時点から多くの主義主張と組織の矛盾をも抱えています。

①打破「〇〇説」：勤皇同志の会

②全国の古代史愛好者、仲間、団体、連合会的組織と数のパワー：愛好者連合の会

③アイデンティティなき国家を憂い国民的事業として解明に取り組む：高い志・ロマンの会

④地域おこし、地方自治体、観光協会等と組んで地域の活性化：地域おこしイベントの会

など、たとえて言えば「すべての各種宗教団体が参加したごとく」混在してスタートしています。そのためには右記の「全邪馬連」設立目的が重要と感じます。

そこでの基本スタンスは
・会員各位の平等を重んじつつ、連帯し各研究成果の発表の場を提供、相互研鑽をする。

加盟団体紹介

■NPO法人阿波国古代研究所

△邪馬台国阿波説の要旨▽

①倭人伝の倭国邪馬臺国の読みは「やまと国」である②「やまと国」は阿波であり、奈良は「おおやまと(大倭・大和・大養徳)国」である③奈良説では「やまと」の根拠となる崇神紀の「倭(やまと)大國魂神社」が天理市の「大和(おおやまと)坐大國魂神社」であるとしているが、誤りである④倭大國魂神社は、阿波国美馬郡に全国唯一式内社として鎮座す

多くの古代史、邪馬台国の研究者、研究団体、在野研究家を集結し相互の研究成果を競い、又、官、学会、研究組織の協力を得て情報の開示要請や研究者の交流、論戦の「場を提供して」成果を出し、よって解明を進める。

・当会には「研究組織」「資金」「人材」「ヒト、モノ、カネ」がないので自ら解明するのは難しい。強みは「全国的組織パワー」「対外的な評価」「顧問パワー」「情報の開示要請」「場の提供」などブランド力を高めることです。相撲で云う「観客を集める」「土俵の提供」「行司役になる」そして「判定を下す」までできるのが理想です。

・団体・個人会員の増員、公的、私的助成金の確保をすすめる財務内容を充実する。その為に

東京支部は本部の協力を得ながら、より大きな目標を目指して取り組んでまいります。



る。これは、倭の地に倭の国の開拓神を祀る神社を意味することから、鎮座地の阿波国が、倭の国(邪馬台国)であったことを証明している⑤倭人伝の「女王国の東海を渡る千余里また国あり、皆倭種なり」とあるのは、阿波国(女王国)と奈良大阪平野(倭種、つまり同国人)の関係を伝えている⑥女王王卑弥呼の名代として、国々の市を監督する「大倭(倭人伝)の駐留拠点」が、奈良纏向の「大市」であり、纏向遺跡は、東西交易拠点の痕跡といえる⑦邪馬台国阿波説は、倭人伝・記紀式内社考古学的史料が整合する。

△直近の行事予定▽
五月二十四日(日)

阿波古代史探訪日帰りバスツアー

代 表 笹田孝至(徳島市上八万町西山九三二)

電話・0801392213246

事務局長 武村璋彌(徳島市富田橋四丁目四五の五)

電話・0901757018051

■出雲邪馬台国研究会

代表 小林 攻一

出雲邪馬台国研究会が設立後、皆様の温かいご支援を頂き、この度第三回の例会開催まで至りましたので左記にて報告いたします。

記

第一回設立会 平成二十六年十一月十六日 六名参席

第二回定例会 平成二十七年一月二十六日 十五名参席

第三回定例会 平成二十七年二月二十三日 六名参席

於 北見市民会館二号室

討議・意見

*後漢書・三国志・隋書・翰苑に記載されている邪馬臺國条文の討論

*倭委夷の語韻 倭はウオ 委はウエイ 夷はイキ

*金印・漢夷奴国王は かんイヌ国王と読む

*漢委奴国王ではない

*国宝・翰苑に記載がある邪馬臺國隣の斯馬国に連なる

斯馬国とは石見国 アイヌ語シマ・シヌマは岩岩山・島の意

日本アイヌ地名小辞典 著山本直文より

*邪馬臺國は山と島に寄り添い海に面した所。海とは東海

こと日本海 素尊水道

*徳島のアワはアイヌ語アバ 海からの入口 アバシリは網走

*古代日本の地名はアイヌ語と古代朝鮮語を以って凡そ解

明できる

*古事記に記載 美斗能麻呂波比ミトのまぐあい

美斗ミトのミは開花後の女核 トは男陰部 アイヌ語小

辞典著山本多助より

*邪馬臺國に関連する地名人名神名が後世にて卑語賤称・難字多面数文字と改変 そして別名が異常に多く特筆

例・須佐之男命・大國主命・加茂大御神・靈輿

*景初三年銘卑弥呼の神獸鏡が島根県松江市大原郡

神原神社古墳から出土

*景初四年銘卑弥呼に受賜された神獸鏡が 宮崎県西都

市高鍋町持田古墳群から出土伝 邪馬臺國末裔と日向

国・西都原王族との親縁関係が成立

*阿蘇山領域の狗奴國の靍智王族とは後の熊襲こと肥後球

磨と大隅曾於・薩摩隼人の阿多と同族

*魏隋遣使は朝鮮半島の錦江・洛東江を水行裸負商街道に

て東海より邪馬臺國に到る

*暖味な古代日本史の真実をハッキリさせたい

連絡先メール・kobakoba2013@ezweb.nijp

■九州の歴史と文化を楽しむ会

九州の歴史と文化を楽しむ会は、古代から中世までの日本全般的の歴史と文化を楽しむ会です。当会は、平成十九年に設立し、現在までに五十五回の勉強会を開催しました。

旅行も五回開催し、平成二十一年の「鹿島神宮と鹿島踊りを知るツアー」では、鹿島神宮拝殿で鹿島踊りを奉舞をしました。

平成二十五年には、大塚初重明治大学名誉教授をゲストに「熊本県の歴史と文化」「森浩一先生を偲ぶ会」のイベントを開催しています。

最近では、複数の歴史研究団体と連携して古代史文化フォーラムという形式で「熊襲・隼人そして古備の謎連続講座」や「徐福と富士古文献(宮下文書)フォーラム」を開催しました。

今年の五月からは「邪馬台国と狗奴国と隼人」の連続

講演を実施します。第一回目は、築地のライブハウスで「九州文化まつり」として、宮崎県出身の美人姉妹のライブショーと志村裕子氏の出版記念会を兼ねて開催します。

〈九州文化まつりの案内〉

五月三十日(土) 十時半〜十五時

築地BLUE MOOD(ライブハウスレストラン)

会費三千元(当日四千元)

第一部・「邪馬台国と古事記」の講演

第二部・黒木姉妹「九州女の宴」コンサート

第三部・志村裕子「出版記念」講演会

申込はブルームードのホームページか電話で

031324916010(平日九時〜十八時)

031354916010(平日の十八時以降、土日祝)

入会費・年会費無料。毎月、土・日曜の午後には港区の公共施設「三田いきいきプラザ」で開催しています。皆様の参加をお待ちしております。(会員数三百五十名)

お問合せは

会長・菊池秀夫 kodaijunka@gmail.com まっ

真説魏志倭人伝研究会

〈古代漢字から解き明かす「魏志」倭人伝の真実〉

■真説魏志倭人伝研究会

「魏志」倭人伝は中国晋の陳寿が三世紀後半に編集した

ものです。当然のことながら当時の漢字の字義用法に基づいて読み解かなければなりません。しかし、現在の研究は清

の時代に刊行(一七二六年)された「康熙字典」の解釈に基づいて

しています。漢字は時代の変遷と共に字義や字形を変え、

変態する生き物なのです。これを漢字の「引伸」と言います

が「魏志」倭人伝には引伸を遂げた漢字が沢山あるのです。

これまでの日本語訳は誤訳だらけと言っても過言ではあり

ません。

「魏志」倭人伝には引伸を遂げた漢字が沢山あるのです。

これまでの日本語訳は誤訳だらけと言っても過言ではあり

ません。

ません。

当研究会では主宰者である北京大学医学部名誉顧問岩元正昭講師の研究成果を学んでいます。西暦一〇〇〇年頃、後漢の許慎によって編纂された『説文解字』に基づくもので、中国では北京人学日本研究中心編「日本学」に発表され、既に学説にもなっています。岩元学説が明らかにした古代の姿は今までの通説とは全く異なったものです。

真説魏志倭人伝研究会は練馬区を中心に岩元学説の講演会を開催しています。真の日本の古代の姿を追求する多くの古代史ファンの方々の参加をお待ちしております。詳細はホームページで確認ください。

住所……………東京都練馬区豊玉北6-3-2 梶山ビル

真説魏志倭人伝研究会

電話……………03-5999-0705、

FAX……………03-5999-0710

メール……………contact@gishwajinden.net

ホームページ……………http://www.gishwajinden.net/about.html

ブログ……………http://himikonomyako.cocolog-nifty.com/blog/

■先古代史の会

状況…当会は平成二十六年三月、後藤幸彦氏が初代会長

となつて発足した新しい会です。邪馬台国探求から始まり、神代を現実と捉え、徐福研究を含む日本の始原を求める取り組みを始めています。当会六世紀以前の日本列島とアジアの繋がりについて、語り合い解明する活動を行っています。多才な人材が新見解を出しあい、和気あいあいの発表会を

続けております。平成二十七年初の会員数約三〇名。初代会長の体調不良により、前田豊が二代目会長となり継続中。

活動…二か月に一〜二回の例会を行っています。今後、講演会や調査見学会等も計画していく予定です。開催場所は東京都港区丁R田町駅近傍の集会所。入会金不要。各イベントは当日受付。いろいろな説も受け入れていきますのでお気軽にご参加ください。

発表例…徐福渡来と日本神話、古代製鉄について、邪馬台国論争、パンゲア大陸、中国の春秋戦国時代、邪馬台国古備論、古代地名伝播等。

案内…三月十四日例会講師池上正治氏「中国大陸における徐福」。春日神社（慶応大学東門の隣）四月二十六日秋川ゆか氏「沖縄のウタキとノロ」を三田イキキプラザB室にて実施予定。

お問合せは

関口佳郎事務局長(電話：042-464-1563)まで

■邪馬台国の会

邪馬台国の会は、日本の古代史の愛好家の集まりです。

一緒に古代のロマンを語り、愛好家の輪を広げませんか。会では、毎月講演会を開き、主宰の安本美典先生より、邪馬台国の謎や最新の古代史情報について、文献学、考古学、言語学、統計学などの幅広い観点から科学的な思考でわかりやすく解説をいただいています。また、著名な先生方の特別講演会（石野博信氏、高島忠平氏など）遺跡巡りの旅行会、線向遺跡、古代出雲など、博物館の見学会（東京国立博

物館、横浜市歴史博物館など）も行なっています。

会には、入会金も年会費もありません。講演会に参加した時のみ聴講料一五〇〇円です。どなたでも自由に参加いただけます。女性会員による「卑弥呼の会」もあります。詳しくは、インターネットのホームページを御覧下さい。「邪馬台国の会」で入力して検索です。http://yamatai.cside.com/

■邪馬台国を考える会の活動状況

一 勉強会について

月一回第三木曜日に佐賀商工ビルで実施している。議題発表者については事前に打ち合わせをする。年一、二回は外部講師に依頼している。

二 遺跡めぐり

二〇一二年 四月に韓国踏査旅行で遺跡、博物館を見学した。

二〇一五年 韓国慶州地区の見学予定。

国内編

二〇一一年 六月 幻の投馬国を訪ねる。

二〇一二年 七月 宗像の遺跡探訪。

十一月 佐賀の弥生遺跡探訪。

二〇一五年 四月 江田船山古墳見学予定。

三 会誌の発行

会誌は季刊で発行している。二〇一五年四月で第十六号。会員の記事を中心に地元での講演会等の記事を掲載している。

※当誌に投稿を希望される方は歓迎します。ただし謝礼はありません。

連絡先 佐賀市八丁畷町六の四 関家敏正

顧問投稿

邪馬台国研究にあたって

付 洛陽発見の三角縁神獸鏡

大阪府教育委員会 西川寿勝

1 もうひとつの研究會活動

いうまでもなく、学問研究をするにあたってはいくつかの重要な約束事があります。邪馬台国研究の場合、『魏志』倭人伝の読解が基本です。今回は『魏志』倭人伝の読解について留意すべきいくつかの点をお話しします。

昨今、研究論文のねつ造や、他者の論文が盗用される実例が発覚し、問題になっています。基礎資料を自身に都合よくねつ造することは論外です。意外に見落とされていることとして、他者の意見と自身の意見が明確に区別されないままの著作や発表があることです。

この問題を回避するために、審査論文では必ず、自説を展開するまえに、先行研究を提示し、研究の現状と問題点を分析する節を設ける約束があります。いわゆる「学史の整理」です。最初の段階で先行研究のなかの基本的文献に賛同しているのか、対立しているのか、明快しておくのです。

多くの研究論文や研究発表は、先行研究をふまえて、より発展した結論へと展開します。そうすると、どこまでが先学の成果で、どこからが自身の成果なのか、整理できていないければなりません。研究の善し悪しは学史を十分理解できているかが、一つのポイントです。論文を審査する側からみれば、

ば、学史の理解度と論の展開方法は見過ごせない点です。

ただし、邪馬台国研究においては、膨大な研究史があることも確かです。これらをいちいち紹介検討することは論文誌数や発表時間におさまりません。さらに重要なこととして、大学や博物館などの研究機構に所属していれば、専門書や最新情報が比較的安易に手に入ります。そうでない場合は古い研究書を探し出して入手するだけでも多くの労力や費用がかかるでしょう。研究のスタート段階から有利と不利の差があることも指摘されています。

このような障害や不利益をなるべく少なくするため、研究テーマが近接する研究者同士が集まって、研究会や連絡会をつくって、情報交換できるようにしくみをつくっています。本会も、邪馬台国研究の情報交換に寄与できれば、さらに多くの人々が集うこととなるでしょう。

2 注意すべき孤高の説

さて、「学史の整理」から安易に解放されようとするあまり、全く学史を無視した突飛な説を展開する人がときどきいます。孤高の説になれば、過去の学説と対比するの必要がないわけでは、「学史の整理」のかわりに学者批判が綴られたりすることもあります。目新しい意見や大胆な発想は、古

史ファンにとつて興味深いものですが、学問の約束事を批判する姿勢には感化されない注意が必要です。

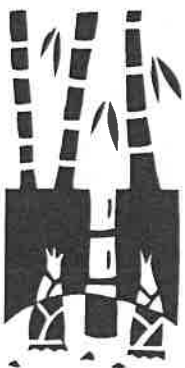
学問の約束事とは、邪馬台国研究の場合、素材となる文献史料や考古資料を正しく活用することにほかなりません。考古資料の場合、その活用には層位学・形式学・分布論・機能論等の方法論があり、方法論をよく理解していれば比較的明快に活用することが出来ます。これについては、機会があれば改めて詳しく説明したいと思います。

文献史料の場合は方法論がほとんど確立しておらず、史料批判は研究者によつて大きく異なる場合もあります。文献史料を読み解くには経緯や蓄積が必要だ、といわれる所

とくに、陳寿の『三国志』は記述の簡略さが際立ち、それが編集方針だとも考えられています。『史記』・『漢書』に比べ、小説的部分がほとんどなく、人間味に欠けると批判されます。それで裴松之(はいしやうし)などが他の文献を加味して注釈を加えたり、皇帝の記録官による起居注(ききよちゆう)で補強されています。これらによつて明代に『三国志演義』が成立し、現代も通じる魅力ある人物像や逸話が語り継がれるようになったのです。

このような『三国志』の一角にある『魏志』倭人伝は、記された文章だけでは意味を限定統一できないところが数多くあります。逆に、逸脱した解釈や想定を呼び込みやすい史料なのです。さらに、漢文特有の簡潔な表現や、原本が失われ、写本に誤字がみられることなどが加わり、解釈の幅が一層広がります。

そうすると、邪馬台国や三世紀の倭人社会について、勝手な想定が先行してあり、そ



れに都合よく改変した『魏志』倭人伝の読み方を提唱する論法が横行するのです。

多くの場合は、『魏志』倭人伝の読み方の改変が先にありきで、その結果として独自の想定が成り立つように語られます。これらは珍説・奇説の特徴の一つです。独自の想定が極端であればある程、「学史の整理」の無視を正当化できるとか、注目される、と勘違いがちです。

『魏志』倭人伝の文言に、新しい読み方や解釈が出来るのであれば、まずはその読み方、解釈こそが世に問われ、議論されるべきなのです。新しい読み方や解釈からなる邪馬台国論がいくら斬新で優れていても、読み方が正しいと判断されなければ空論ではないでしょうか。

つまり、『魏志』倭人伝の撰者、陳寿が考えていたとおりに読むように努めなければなりません。文献史料は読者の考えによつて読むのではなく、撰者の考えを読みとるのが第一義だといわれます。

『魏志』倭人伝の読み方の多様性が、あまり議論されないことには理由があります。六五巻からなる『三国志』の膨大な文章はこれまでに緻密に検討されてきました。そうすると、『魏志』の『魏志』倭人伝の中だけに、特別な言い回しがあるとは考えにくいことがわかります。つまり、新しい読み方や解釈をする場合、それと共通する語句について、読み方や解釈の変更が『三国志』の全体、あるいは他の中国書でも検討されなければなりません。そういう検討を抜きにして、一部分の意味を変えてしまおうというやり方は、学問の約束事から逸脱しているのです。

3 もういちど『魏志』倭人伝を読む

このような過ちに陥らないため、あるいは眼をひくような著作や発表の是非を見抜くためには、『魏志』倭人伝の「評

訳」をよく理解・信用しておく必要があるとおもいます。もちろん、『魏志』倭人伝の口語訳や現代語訳には定まったものがなく、現在でも字句ごとに議論されています。ところが、一般によく知られる訳は意外と古くから変わっておらず、多岐に及ぶわけではありません。これは記紀の読みに関してもいえることだとおもいます。

もともとよく知られる『魏志』倭人伝の訳本は、岩波文庫の『魏志倭人伝 後漢書倭伝 宋書倭国伝 隋書倭国伝』(中国正史日本伝上)石原道博訳 だと思えます。この本は『魏志』と『後漢書』と『宋書』と『隋書』の倭国に関する部分だけを抜粋して、原文と口語訳を載せ、用語に注釈を加えたものです。『魏志』倭人伝はそのうちの二六頁だけですが必携の基本文献です。

原文・口語訳 現代語訳と用語に注釈を加えた訳本に、学習研究社の『倭国伝』(中国の古典一七 藤堂明保訳)があります。この本には『魏志』倭人伝のほかに、『後漢書』、『宋書』、『隋書』、『旧唐書』、『新唐書』、『宋史』、『元史』、『明史』の倭国と日本国に関する部分が収録されています。さらに、『魏志』の夫余伝・高句麗伝・東沃沮伝・挹婁伝・濊伝・韓伝も収録されています。この本は二〇一〇年に講談社学術文庫として再販、手に入りやすくなりました。

また、三品彰英編著『邪馬台国研究総覧』創元社一九七〇年もよく知られ、原文と現代語訳に詳細な注釈が収録されています。この本は『魏志』倭人伝・『魏略』逸文・『太平御覧』所引の『魏志』倭人伝の字句が対比されています。また、一九六〇年代までの基本本文献が要約紹介されています。

最近刊行された『魏志』倭人伝の訳本として、新人物文庫の『現代語訳 魏志倭人伝』松尾光訳があります。原文・口語訳 現代語訳とほ



ふな注釈と解説が特徴です。今、もともとも入手しやすい安価な注釈本です。

『魏志』倭人伝に詳しくなれば、読破したくなるのが陳寿の『三国志』です。明代の『三国志演義』は様々な訳本があるのですが、正史の『三国志』は原文と校注のみの難解な本が大半です。現代語訳であれば、ちくま学術文庫の『正史三国志』今鷹真ほか訳 がお勧めです。八巻からなる文庫本で、一〜四巻が『魏書』、五巻が『蜀書』、六〜八巻が『呉書』です。裴松之の注釈が網羅され、解説も収録されており、初心者でも理解しやすい本です。これは筑摩書房の『世界古典文学全集 三国志』一九七七年を文庫化したものです。



付 洛陽発見の三角縁神獸鏡

最近、魏の都があった洛陽で三角縁神獸鏡がみつかったとする論文が発表されました。大変話題となっています。論文は王趁意氏による「洛陽三角縁神獸鏡笠松紋神獸鏡初探」で『中原文物』二〇一四年六期(二月号)河南省博物館と掲載されました。王氏は洛陽周辺の鏡を集成して紹介し

た「中原威鏡聚英」を刊行するなど、鏡の研究者です。さらなる論文も用意しているとのこと。

紹介された鏡は直径一八三センチメートル、外縁がそり立つ三角縁で外区に鋸歯紋帯、複線歯紋帯、鋸歯紋帯をもち、内区には四神四獣を刻むという、典型的な三角縁神獸鏡の要素を示します。銘文は「吾作明鏡 真大好 古有聖人東王父西王母 師(獅)子辟邪口銜巨 位至公卿子孫壽」です。

ただし、発掘調査でみつかった鏡ではなく、「近期在洛陽発現」と記されるのみで、遺構や共存遺物などの情報はありません。その後の王氏の談話によると、この鏡は二〇〇九年以前、白馬寺の油村に住む農民が掘り当てたそうです。白馬寺は漢魏洛陽城(都城)のすぐ西側の寺院です。

わたしが二〇年前ほど前に訪れた時、白馬寺周辺は一面麦畑で、都城の西側城壁がところどころ残る状況でした。漢魏の大型墓があるのは都城の北側の邙山(ぼうざん)周辺で、後漢皇帝陵の伝承地が点在します。白馬寺周辺でも中小墓の発見調査例がいくつかあり、古墓群が埋もれている可能性はあると思います。例えば、白馬寺近辺で直径四九メートルの墳丘と前面に三か所の祠堂をもつ後漢末の古墳が発見されています。全長二〇メートル以上で三室構造の祠堂が判明し、激しく盗掘されましたが玉衣や渡金金具などが残されていました。

しかし、出土地が特定できないのであれば、日本の三角縁神獸鏡を模した偽物とも疑いたくなります。また、同鏡もみつかっていません。

かつて、三角縁神獸鏡はほとんど同時期に作成され、形式



差が認められないと思われていました。現在では五段階の区分が認められ、継続的に製作されたと考えられています。今回の鏡は外縁の厚みや内区図像の特徴、乳と乳座の形状から第Ⅱ段階に位置づけられ、型式的には逸脱する要素がありません。

最大の違和感として、銘帯が太く、銘文の一字一字が大きいことです。三国時代までの鏡の中では異例の大きさです。これに連動して櫛歯紋帯が欠落しています。後漢鏡の系譜としては、銘帯の外側の櫛歯紋帯が欠落することは極めてまれで、そういう意味では、できの悪い偽物ともみえてしまっています。

ただし、三角縁神獸鏡の系譜では、銘帯に小乳や方格を配したり、唐草紋を刻むなど、通常の後漢鏡の系譜にはあり得ない多様性が数多く認められます。なるだけ多様性をもたせて大量につくろうとした結果、図像構成などの約束事を逸脱、同鏡鏡が数多くある異端の鏡群となりました。そうすると、今回の鏡にある銘帯が太く、櫛歯紋帯が省略されている約束事の逸脱は三角縁神獸鏡群の許容範囲だと思えるのです。

さらに、今回の鏡の銘は「吾作明鏡」で始まり、「吾作」系鏡群であることがわかります。「吾作」系鏡群は第Ⅰ段階から第Ⅴ段階まで、長期にわたって多様な三角縁神獸鏡があります。神獸はつり上がった眼に鼻筋が通る点、神像は渦巻き状の冠をかぶり、服のヒタが密に刻まれる点などの作風の特徴が指摘されています。これらは今回の鏡にピッタリ当てはまります。

ちなみに、神像のひざ下の台の表現や、つり上がった眼で鼻筋が通り、巨と呼ばれる椀をかむ怪獣は対置式神獸鏡や同向式神獸鏡にはありません。環状乳神獸鏡の図像表現の影響と考えます。そして、三角縁神獸鏡中で環状乳神獸鏡の構成を取り入れたものは唯一「吾作」系に限られるのです。

大きな共通点は銘にもあります。本来の後漢鏡で「上有仙人不知老」とされる字句を、「吾作」系三角縁神獸鏡の中には「古有聖人東王父」と刻むものがあります。今回の鏡は「上有聖人東王父西王母」と刻みます。また、「有」字の第一画をカギ形にする癖、「獅子」、「辟邪」、「壽」字の略し方法が共通します。

新たな三角縁神獸鏡としても、三国時代の遺構に伴う確証がないので、後の時代に踏み返された鏡かどうか、検討する必要があります。写真をみるかぎり、銅質や鍍上がりはよく、銘や図像の線刻は非常に鋭利で鮮明です。対して、外区の複線波紋や圏線が太くなります。これは外区を平滑に研ぎ出し(キサゲ処理)、丁寧に研磨したことを示します。踏み返し鏡は研ぎだされた鏡から型をとるので、研ぎ出しの簡略が多く、さらに研ぎ出して紋様が潰れる部分が多々見受けられるのです。その他、踏み返し鏡によくみられる鈕座のつぶれや鑄肌のザラツキなどが今回の鏡にみられず、後の時代のコピー鏡とは思えません。

今回の鏡の正体はいずれ明らかになるでしょう。真偽がいずれにせよ、三角縁神獸鏡の分布は列島にかたより、この趨勢は変わらないでしょう。つまり、製作工房がみつかったのではなく、製作地が列島か、半島か、洛陽かを確定する決定打にはならないことです。

最後に、今回の鏡が与える影響についての私見です。わたしは第Ⅰ段階の三角縁神獸鏡や関連鏡群に「景初三年」「正始元年」「景初四年」銘があることから、「魏志」倭人伝の「銅鏡百枚」と考えています。

第Ⅱ段階は狗奴国と交戦を報告し黄幢を渡された正始四(六年)二四三(二四五)の朝貢時、第Ⅲ段階は台身による泰





写真は『中原文物』2014年6期より

始二年(二六六)の朝貢時などと推定します。正史に鏡の下の賜が記載されないことから、帯方郡までの遣使でもその地で下賜されたと考えます。

実際、古墳から複数の三角縁神獸鏡が発見された場合、第Ⅰ段階のみはありません。もともと古い奈良県黒塚古墳・大阪府安満宮山古墳・兵庫県西求女塚古墳では、第Ⅰと第Ⅱ段階の鏡が混在し、二四五年以降、二六六年までに古墳が成立して、副葬が始まると考えます。理化学分析(放射性炭素法)から推定された年代観と、奇しくも合致します。

今回発見の鏡は第Ⅱ段階の構成でありながら、画像の間を粒々で埋める点や銘文が大きな字で刻まれる点など、第Ⅲ段階の鏡によくみられる要素も含まれます。そうすると、第Ⅱと第Ⅲ段階で下賜された鏡群の間に作られた過渡的鏡かもしれません。つまり、倭国に下賜されなかった時期の製作です。このような分析が製作地論争の決着に一石を投じることを期待します。

事務局だより

全国邪馬台国連絡協議会は、お蔭様で設立から一年を迎えました。試行錯誤の討論をしながら少しずつ前進してきたつもりですが、皆様には理事達がどのような活動をしているのかわからなかった点もあると思います。今回は一方的かもしれませんが、運営する側の活動の報告を伝えたいと思います。今後は皆様の声を反映できる場所として会報を充実させていきたいと思っています。

設立以前から二〇一五年四月末時点までの主な活動内容をご報告します。

- 二〇一三年
- 十月二十七日(土)「設立準備委員会」
- 「三田いきいきプラザ」九名
- 十一月三十日(日)「設立準備委員会」
- 「港区立生涯学習センター」九名
- 二〇一四年
- 一月五日(日)「設立準備委員会」
- 「港区立生涯学習センター」九名
- 二月一日(土)「設立準備委員会」
- 「神明いきいきプラザ」十名
- 四月十九日(土)「設立総会」
- 「三田いきいきプラザ」
- 「設立準備委員会」は「企画委員会」に変更
- 五月十一日(日)「第一回企画委員会」
- 「港区立生涯学習センター」九名
- 五月三十一日(土)「第二回企画委員会」
- 「豊岡いきいきプラザ」八名
- 七月六日(日)「第三回企画委員会」
- 「豊岡いきいきプラザ」九名
- 七月十九日(土)「東京地区大会」
- 「文化シャッターBOXホール」
- 八月三日(日)「第一回理事会・第四回企画委員会」
- 「豊岡いきいきプラザ」九名

- 八月三十一日(日)「第五回企画委員会」
- 「神明いきいきプラザ」七名
- 十月五日(日)「第一回全国大会」
- 「明治大学リハビリホール」
- 十月三十一日(金)「第二回理事会 第六回企画委員 会」二十名
- 十一月二十二日(土)「第七回企画委員会」
- 「港区立生涯学習センター」七名
- 二〇一五年
- 一月二十四日(土)「第八回企画委員会」
- 「港区立勤労福祉会館」八名
- 二月二十一日(土)「第九回企画委員会」
- 「ありすいきいきプラザ」八名
- 三月七日(土)「第一回執行部会」
- 「豊岡いきいきプラザ」六名
- 四月十二日(日)「第二回執行部会 第三回理事会」
- 「神明いきいきプラザ」十名

これらの活動は、理事や企画委員のボランティア活動で成り立っています。会議室は公共の施設を活用し、交通費は自前です。遠方の先生方との交渉も自前です。このような事を続けてこれたのも、会の発展を願うてのことです。

今後、一般法人化に向けて取り組んでいく所存ですが、まだまだ財源や人材が不足しているのが実情です。会員であることを継続していただくと共に、多くの人に声をかけていただいて会員の増加にご協力御願いたします。またボランティア活動に参加できる方も募集します。

全邪馬台国連絡協議会の運営にご協力御願いたします。

事務局長 菊池秀夫

